

福山大学 大学教育センター 大学教育論叢
第2号(2015年度) 2016年3月発行

エストニアのナショナルテストにおける
スピーキングテストの考察

米崎 里

エストニアのナショナルテストにおける スピーキングテストの考察

米崎 里*

Investigating the English Speaking Test Component of the Estonian National Examination

Michi YONEZAKI *

ABSTRACT

The Ministry of Education, Culture, Science and Technology or MEXT (2014) has announced that even the university entrance examinations, communication skills in terms of the four language skills need to be evaluated properly. This means that the skill of speaking, which until now has been ignored, will be given more consideration along with the other skills. However, the development of the speaking test evaluation, in particular, has made little progress in Japan (Ito, 2008). Estonia, on the other hand, has had an examination for measuring national oral proficiency, including a test for measuring secondary level exit examinations, since 1997. The purpose of this paper is to give an overview of the Estonian speaking test, and to look at its construction, task types, procedures for marking and teacher training for implementing the test. Suggestions will be made as to how we can incorporate ideas from the Estonian experience into the Japanese system.

キーワード：エストニア，スピーキングテスト，ナショナルテスト，CEFR

1. はじめに

平成 25 年文部科学省が公表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」の一つに、大学入試においても 4 技能の測定可能な資格・検定試験等の活用が提言され、今後、学校現場ではスピーキングテストの必要性がますます高まると考えられる。日本人英語学習者のスピーキング力の問題点として、様々な研究者や学校現場から、大学入試の制約があげられている（たとえば白井，2012）。スピーキング力の育成がこれほどまで強調されている今、何らかの形で大学入試の中で英語学習者のスピーキング能力を測るテストの導入は検討する必要がある。しかしながらスピーキングテストを実施する際、採点者の負担、採点の公平性、時間的制約、テスト内容の妥当性など様々な問題が伴い、とりわけスピーキング評価は今も発展途上である(伊東，2008)。ましてや国レベルで実施するとなるとハードルはかなり高い。

エストニアでは、1997 年から大学入学選抜試験を兼ねた 12 学年（高等学校）修了試験（riigieksam：以降ナショナルテストとする）の英語試験の中で、リーディング、リスニング、ライティングとと

*大学教育センター・人間文化学科准教授

もにスピーキングテストが課されている。個別大学による選抜試験ではなくナショナルテストとしてスピーキングテストを課している国は筆者が知る限りなく、エストニアのスピーキングテストは注目するに値すると言えよう。

本稿では、日本の英語教育の改革、とりわけ大学入試の改革を視野におきながら、エストニアのナショナルテストのスピーキングテストに着目し、テスト構成、テスト内容、評価方法を検証することを目的とする。本論に入る前に、まずエストニアの外国語教育を概観する。

2. エストニアの外国語教育

(1) 外国語の学習開始と外国語の種類

エストニアの学校における外国語教育は、中等教育修了時までには2つの外国語（外国語Aおよび外国語B）を履修しなければならない。第1外国語である外国語Aは初等教育3学年から学習が始まるが、1学年から3学年の間で始めることができ、スタート時期は学校の裁量による。第2外国語である外国語Bは通常初等教育6学年から学ぶ。外国語Aと外国語Bは必修である。さらに、第3外国語である外国語Cは10学年(高等学校1年にあたる)から選択として学習することができる。

外国語Aとして英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語が提供されているが、最も選択されているのは英語である。また外国語Bは英語、ロシア語、ドイツ語、フランス語、その他の外国語などが提供されている。ただし、ロシア語系学校¹では、外国語Aとしてエストニア語を学ばなくてはならない。

外国語学習時間は基礎学校第1段階²（1学年から3学年）においては、外国語Aが週1時間学習される（教育課程就業時間全体の5%）。基礎教育第2段階（4学年から6学年）においては外国語Aが週3時間（全体の12.3%）、外国語Bが週1時間（全体の4%）学習される。また基礎教育第3段階（7学年から9学年）において外国語Aが週3時間（全体の10%）、外国語Bが週3時間（全体の10%）学習される。

昨今エストニアの外国語教育は教科横断による学習やCLIL（Content and Language Integrated Learning）による学習、アクティブ・ラーニングによる内容重視の学習が基礎学校段階でも提唱されている。

(2) 外国語学習目標

エストニアの基礎学校ナショナルカリキュラム（2011）には、外国語Aの学習と教育目標が、以下のように述べられている。

- 1) 日常それぞれ学習している外国語でコミュニケーションを行うことができ、年齢に応じた外国語で書かれたテキストを理解することができる言語使用者のレベルに到達する。
- 2) 外国語に興味を持ち外国語を通して視野を広める。
- 3) それぞれの文化の特有性に気付き、それぞれの文化を尊重する能力を習得する。
- 4) 他の外国語を学習し、たえず外国語を磨く能力を身につける。
- 5) 外国語が話されている国や文化に興味を持つ。
- 6) 他の領域や科目において必要な情報を検索するために、外国語で年齢に応じた情報源（たとえば、書物、辞書、インターネット）の使い方を知る。

一方、高等学校ナショナルカリキュラム（2011）には、外国語の学習と教育目標が、以下のように述べられている。

- 1) オーセンティックに外国語が使われている環境で自律してその言語を使えるレベルの外国語能力を習得する。

- 2) 自国の文化とその他の文化の類似点、相違点を理解し尊重する。
- 3) 文化的規範を考慮して目標言語の話者とコミュニケーションを図る。
- 4) 外国語の勉強を続け、様々な国際プロジェクトに参加し、国際的な環境で外国語を使うことができる。
- 5) 自分の知識、能力、長所、短所を分析できる。

(3) 外国語能力到達レベル

エストニアでは the Common European Framework of Reference for Language (CEFR) に基づきエストニア独自の外国語能力の到達レベルが設定されている。CEFR 自体は外国語レベルを A1 (Breakthrough)、A2 (Waystage)、B1 (Threshold)、B2 (Vantage)、C1 (Effective Operational Proficiency)、C2 (Mastery) の6種類としているがエストニアの外国語能力到達レベルではさらに細分化し、A1.1 から C1 の9段階が設定されている。

表1、表2及び表3は基礎学校のそれぞれの段階の修了時および高等学校修了時までには習得が期待される外国語能力到達レベルである。高等学校では、外国語能力の到達レベルのB1もしくはB2のどちらかを学校が選択する。

表1 基礎学校修了時までには期待される外国語能力

学年	外国語の種類	リスニング	リーディング	スピーキング	ライティング
第1段階 (3学年まで)	英語	A1.2	A1.1	A1.2	A1.1
	その他の外国語	A1.1-A1.2	A1.1	A1.1-A1.2	A1.1
第2段階 (6学年まで)	英語	A2.2	A2.2	A2.2	A2.2
	その他の外国語	A2.1	A2.1	A2.1	A2.1
第3段階 (9学年まで)	英語	B1.2	B1.2	B1.2	B1.2
	その他の外国語	B1.1	B1.1	B1.1	B1.1

(出典：Ministry of Education and Reserch,2011a)

表2 高等学校修了時までには期待される外国語能力 (B1 レベル)

	リスニング	リーディング	スピーキング	ライティング
満足な(satisfactory)レベル	B1.1	B1.1	B1.1	B1.1
優良(good)、優秀(very good)なレベル	B1.2	B1.2	B1.2	B1.2

(出典：Ministry of Education and Reserch,2011b)

表3 高等学校修了時までには期待される外国語能力 (B2 レベル)

	リスニング	リーディング	スピーキング	ライティング
満足な(satisfactory)レベル	B2.1	B2.1	B2.1	B1.2
優良(good)、優秀(very good)なレベル	B2.2	B2.2	B2.2	B2.1- B.2

(出典：Ministry of Education and Reserch,2011b)

なお、高等学校ナショナルカリキュラムには、それぞれのレベル (B1 と B2 レベル) の期待される学習成果が以下のように記載されている。

【B1 レベル】

- 1) 自分の馴染みのあるあるいは興味のあるテーマに関しての内容を理解できる。
- 2) 自分が学習している外国語を話す人々と日常のコミュニケーションを大まかに行える。
- 3) 自分の体験、行事、夢、目標を描写でき、自分の立場や計画を説明したり、文章で書くことができる。
- 4) 馴染みのあるテーマに関して簡単な文を編集することができる。
- 5) 学習している外国語の国の文化的規範を考慮することができる。
- 6) 学習している外国語の国の文化に興味を持ち、外国語で文学作品を読んだり、映画やテレビ番組、演劇を見たり、ラジオを聞いたりすることができる。
- 7) 他の領域で必要な情報を探するために外国語による引用情報（例えば翻訳辞書、インターネット）を使うことができる。
- 8) 学習目標を設定し、到達度を評価し、必要なら学習方略を選んだり、変えることができる。
- 9) これまで習得した知識と、外国語や他の領域の知識を統合することができる。

【B2 レベル】

- 1) 複雑なテキストの要点、あるいは、抽象的もしくは具体的なテーマにおける要点を理解できる。
- 2) ネイティブスピーカーと自然に流暢に会話ができる。
- 3) 自分の意見を説明でき、関連ある観点の長所、短所を考慮できる。
- 4) 様々なテーマにおいて首尾一貫した、論理的な文章を作ることができる。
- 5) 自分が学習している言語の国の文化的規範を考慮できる。
- 6) 外国語が話されている国の文化的生活に興味を持ち、外国語で文学作品を読んだり、映画やテレビ番組、演劇を見たり、ラジオを聞いたりすることができる。
- 7) 他の領域で必要な情報を探するために外国語による引用情報（例えば翻訳辞書、インターネット）を使うことができる。
- 8) 学習目標を設定し、到達度を評価し、必要なら学習方略を選んだり、変えることができる。
- 9) これまで習得した知識と、外国語や他の領域の知識を統合することができる。

エストニアの外国語到達目標は、CEFR を利用することにより、明確な到達目標と評価基準が確保されていることがわかる。なお、ナショナルテストもこの目標値を基準にして作成されている。

3. ナショナルテスト

(1) ナショナルテストの目的

1997 年から高等学校修了 12 学年時に卒業試験としてナショナルテストを全員が受験することが義務づけられた。この試験はナショナルテスト・資格センター (the National Examination and Qualification Center: NEQC)³が管轄し、試験結果は大学入学のためにもつかわれる。2001 年 1 月ナショナルテストの開発と計画がエストニアの教育科学省 (The Estonian Ministry of Education and Science)⁴第 18 条項に規定され、条項の中でナショナルテストの目的として以下のように述べられている (Alas & Liiv, 2009)。

- 1) 基礎学校並びに高等学校のカリキュラムで述べられている教育目標の達成度を評価するため。
- 2) 学校や教師に自分の生徒と他の生徒の試験結果を比較する機会を提供するため。
- 3) 国家試験の内容や形式を通して、教育課程の方向性を導くため。
- 4) 教育レベルと教育段階を関連付けるため。
- 5) 外部からの採点を通して、関係者にフィードバックを与え、ナショナルカリキュラムや教科書、現職教員研修の変更を計画し、また実行させ、それぞれの分野による開発を行わせるため。

2011年新カリキュラムがエストニアの教育研究省（the Estonian Ministry of Education and Research）により採択され、その中で高等学校を修了するには2つの外国語において外国語能力がCEFRのBレベルに到達することが規定された。さらに2014年4月より、エストニアでは高等学校卒業条件として(1)ナショナルテスト、(2)学校試験（school examination）、(3)調査論文もしくは実習（practical work）に合格しなければならないことが決められた。このうち学校試験は各学校が試験科目や内容を決定する。また調査論文もしくは実習に関しても各学校が決め、評価も学校が行う。一方、ナショナルテストでは、(1)エストニア語、あるいは第2言語としてのエストニア語、(2)数学、(3)外国語の3種類が必修科目となっている。

(2) 外国語試験の種類と概要

ナショナルテストの外国語の試験として英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語のいずれかを受験することができる。これまで外国語試験を作成していたNEQCが2012年よりInnove Foundationに管轄が移り、現在はInnove Foundationが外国語試験を作成している。外国語試験は外国語能力到達レベルのB1もしくはB2レベルを目標として作成されている。試験の点数の50～74%を得た生徒はB1レベル、75～100%を得た生徒はB2レベルの資格証明書がもらえる。

外国語試験の内容は、表4にあるようにライティング、リスニング、リーディング、スピーキングそれぞれから出題されており、配点もほぼ均等となっている。本論文が注目するスピーキングテストも全体の20%を占めている。日本のセンター試験は筆記試験とリスニングに分けられているが、筆記試験ではリーディングの比重が高く、アウトプットの力を測る問題といえるのは整序問題くらいであり、配点比率は全体の6%くらいである（伊東・川村・島田・西原・船戸，2007）。また試験時間も筆記試験が80分、リスニングが30分であるが、エストニアの試験時間は3時間55分となっておりかなり長い。

表4 英語試験の概要

	問題数	時間	点数
ライティング	2	90分	25
リスニング	5	40分	25
リーディング	7	90分	30
スピーキング	2	15分	20
合計		3時間55分	100

(出典: Alas, 2014)

4. スピーキングテストの問題形式・内容

次に、スピーキングテストの問題形式・内容を詳細に見ていく。表5はスピーキングテストの概要である。スピーキングテストは面接官との対面のインタビュー形式で行われ、やりとりは全て英語で行われる。面接官は英語のネイティブスピーカーではなく、エストニア人の教師である。

まずスピーキングテストの導入パートでは、面接官から口頭でスピーキングテストの開始が伝えられ、受験者のコード番号が確認される。そしてその後、受験者に簡単な質問⁵を行う。この導入パートはウォームアップが目的であるため、評価はなされない。この導入パートの時間は2分以内とされている。

引き続き2つのタスクが実施される。Task 1では受験者が描写・比較・分析をすることを目的としたタスクを行う。はじめに、受験者は裏向けられている10枚のカードから1枚を選ぶよう指示される。同じレベルのタスク問題が10種類用意されており、受験者が自分で問題を選ぶようになって

表5 スピーキングテストの概要

パート	形式と内容	配点	時間
導入	ウォームアップのための質問	なし	2分以内
Task 1	2枚の写真を描写・比較・対比する問題。その後、話題に関する質疑応答。	20点	5-6分
Task 2	あるトピックに関して、賛成か反対かの意見を述べその理由を述べる問題。その後、話題に関する質疑応答。		6-7分

(出典: Alas, 2014)

いる。カードには2枚の写真が並べられており、面接官が2枚の写真を描写・比較・分析をするよう口頭で伝える。受験者には1分間準備時間があたえられる。1分間経過したところで、2分間でスピーキングをするよう面接官が指示する。スピーキングの課題内容は口頭でも伝えられるが、2枚の写真の下にも指示されている。Alas (2014) による Task 1 のサンプル問題では、1枚は兄弟がたくさんいる親子の写真であり、もう1枚は、2人の子供と父親がゲームをしている写真である。この2枚の写真が平行に並べられており、その下にスピーキング課題“**What are advantages and disadvantages of having a big family?**”が書かれてある。受験者がまず2枚の写真を描写し、その後スピーキング課題に対して自分の意見を述べる。その後、面接官が、さらに次のような質問をする。

- 1) What kind of home did you live in as a child?
- 2) What kind of home would you like to have in the future?
- 3) Has the life of young people become more stressful compared to the past?
- 4) What would you like to know about the parents in the pictures?

これらの質問は全て尋ねられ、受験者がそれぞれの質問に対して答えれば、次の質問に移る。受験者の答えに対するコメントや答えた内容に対してさらなる質問はしない形式をとっている。Task 1 の実施時間は、5分から7分くらいを目安にしている。

Task 2 は図1に示すようにあるテーマに対して自分の意見を述べる問題である。Task 1 とは関連のないトピックとなっている。受験者は課題が与えられたあと、2分間の準備時間が与えられる。その後2分間で自分の意見を述べる。

MONOLOGUE

Read the topic below and prepare to speak about it. Use the questions given to help to plan your monologue.

Some people say that helping others in a special skill.

Why do you think they say that? Do you agree? Give reasons.

(出典: Alas, 2014)

図1 Task 2 のサンプル問題

Task 1 と同様、受験者が自分の意見を述べた後以下のような質問がなされる。受験者が答えれば、それに対してコメントや答えに対するさらなる質問はしないで、次の質問に移る。

- 1) What kind of volunteer work would you be prepared to do? Explain.
- 2) Is it common for upper secondary school students to volunteer?
- 3) Why do some people in Estonia find it difficult to ask for help?
- 4) When can somebody be considered a hero?

Task 2 の実施時間は 6 分から 7 分を目安としている。Task 2 が終了した時点で、受験者にスピーキングテストの終了を面接官が告げる。

5. スピーキングテストの評価方法

スピーキングテストの評価は評価表 (Appendix) に従い、(1)タスクの達成度、(2)語彙、(3)文法、(4)流暢さと発音の 4 つの観点で 0 点から 5 点で採点され、20 点満点 (5 点×4 観点) となっている。評価表にはそれぞれの点数に該当する評価基準とキーワードが記されている。このキーワードには下線が引かれており、評価基準を要約したものとなる。例えば、語彙の観点では、5 点に該当するキーワードは wide vocabulary (幅広い語彙)、4 点が good vocabulary (十分な語彙)、3 点が basic vocabulary (基礎語彙)、2 点が limited vocabulary (限られた語彙)、1 点が very limited vocabulary (非常に限られた語彙)、0 点が vocabulary/inappropriate (不適切な語彙) となっている (Appendix 参照)。

評価は、Task 1 と Task 2 にそれぞれの点数をつけるのではなく、2 つのタスクが終了した時点で、タスク全体を評価する。

試験は面接官と採点者の二人体制になっている。面接官は採点に関与せず、逆に採点者はスピーキングテストの進行に関与しない。

6. スピーキングテストに向けての教員研修

年度によって異なるが、エストニアのナショナルテストの英語のスピーキングテストを受験する生徒の人数は毎年約 7,500 人から 9,500 人となっている (Alas&Liiv, 2014)。この人数の受験者数を面接し、採点するのは、NEQC (現在は Innove) の管轄で研修を受け資格を与えられた高等学校の教員が主である。試験当日、教師は面接官、採点者のいずれかを担当するが、まれに両方を担うこともある。

2008 年より、より公平なスピーキングテストを実施するために、スピーキングテストを行う際、スクリプト (script・台本) が用いられるようになった (Kont-Kontson, Alas and Liiv, 2013)。面接官はこのスクリプトに従って、スピーキングテストを進めていく。2008 年度のスピーキングテストの面接官及び採点者の研修は 4 時間のプログラムで構成され、プログラムの内容は、スクリプトの機能・役割の理解、タイムラインに沿ったスクリプトの使い方の解説及び読み上げの練習、ビデオを視聴しながら採点の演習が組み込まれていた。

2014 年度より新カリキュラムに基づいた試験が実施され、それに伴い、これまで資格を持っている面接官、採点者に対しても、全員の再研修が義務付けられた。面接官が発する英語、時間制限等、すべてスクリプト通りに行うことが義務付けられた。

7. 教育的示唆

エストニアのナショナルテストにおけるスピーキングテストは 1997 年から実施されており、今日まで改善を重ね継続されてきている。エストニアのナショナルテストの受験者は、1 万人弱であり、また面接官・採点者である教師の人数も 998 名 (Alas & Liiv, 2014) であり、人数が少ないからこそスピーキングテストが実施しやすいことは事実である。しかしながら、エストニアでは全国レベル

でのスピーキングテストが今日まで継続されており、これは他の国では見られないことである。本節では将来の日本の大学入試の改革を念頭に入れながら、エストニアのナショナルテストにおけるスピーキングテストに対する教育的示唆を述べる。

まず、何より他の技能と同様スピーキング能力がナショナルテストでも問われており、評価がきちんとなされていることである。ナショナルテストの中でスピーキングテストが問われれば、学習者の日常の授業等のスピーキング活動に対する意識も高くなる。確かに日本の中・高等学校でも以前に比べると日常の授業の中でスピーキング活動がより頻繁に行われるようになってきている。しかしながら、生徒たちの出口である大学入試は依然としてリーディングの比重が高いため、学年が進むにつれ、特に高等学校では多くの生徒たちはスピーキング能力の改善より、目の前の大学入試に合格することが目標となる。その結果、言語学習に偏りが出てしまっている。特に日常外国語を話す必要性に迫られない環境にある日本の生徒にとって、言語学習の一般的なモチベーションは試験であると言わざるをえない。学習者のスピーキング能力を高めたいなら、スピーキング活動だけでなくそれを評価する必要がある。しがたって、エストニアのナショナルテストにおけるスピーキングテストの実施は、スピーキング能力の育成に重要な役割を果たしていると言えよう。

2 点目はエストニアのナショナルテストのスピーキングテストには多くの高等学校の教員が関わっていることである。スピーキングテストの作成は **Innove Foundation** が管轄となり、主に大学教員の専門家が中心となり作成されているが、主として面接官及び採点者は大学教員ではなく高等学校教員である。もちろん面接官や採点者は自分が教えていない学校の生徒たちを担当する。エストニアではスピーキングテストをより妥当で公平なものになるように面接官や採点者に対する教員研修はもちろんのこと、テスト終了後、面接官や採点者に対してアンケートを取るなどフィードバックを行っており、その検証がなされている。高校現場の教師であるからこそ、スピーキングテストが日常の授業内容とかけ離れていないか、ナショナルカリキュラムで述べられている教育目標に沿っているか、テスト形式や内容が生徒にとって妥当であるかをより分析し検証できると考えられる。面接官及び採点者が高等学校教員であるために、逆に日常の授業がナショナルテストに合わせた授業になるかもしれないという懸念があるかもしれないが、少なくとも大学入試選抜試験を兼ねたナショナルテストに、大学教員だけでなく、高等学校の教員も関わっていることはたいへん興味深い。

3 点目は、スピーキングテストの公平性と信頼性を保つためのスクリプトの使用である。エストニアでは、2008年よりスピーキングテストの手順をより標準化するためにスクリプトが導入され、このスクリプトに沿ってスピーキングテストの実施が義務付けられた。Alas(2010, p.65)は、「エストニアのナショナルテストは、英語のネイティブスピーカーでない英語教師によってインタビューが行われる。このスクリプトは、面接官にとって役に立つだけでなくよりテスト自体に信頼性を持たせている」と述べている。スクリプト導入の際には教員研修が実施され、この研修を受けて初めて面接官と採点者の資格が与えられる。このスクリプトにはテストの手順や時間配分だけでなく、それぞれの場面で発する面接官の言葉が記されている。2009年に実施されたスピーキングテストにおいて、スクリプトの使用に関するアンケート調査 (Kont-Kontson, Alas and Liiv, 2013) によると、面接官を行った教師の89%は「スクリプトは役に立った」と述べており、81%が「スクリプトは明確であった」と述べている。また72%が「スクリプトは十分詳細であった」と述べており、77%が「スクリプトは使いやすかった」と答えている。しかしながら、このスクリプトの使用が万能薬というわけではなく、約4分の1が「インタビュー中、特に当惑することは何もなかった」と答えている一方で、約4分の3がスクリプトに対して当惑した点があったと述べている。その理由として、「インタビュー中、決められた以外の言葉を発することができず、自然なやり取りでなかった」「インタビュー中はスクリプトがあるため、創造性が生み出せない」「スクリプトに書かれた言葉のみ使わなくてはいけなかった」「多くの生徒に同じことばだけを使わなくてはいけない」という理由があげられている。スクリプトの使用が必ずしも100%面接官の満足のいくものではないかもしれないが、少なくとも面接官の負担、とりわけ英語使用の負担を軽減し、スピーキングテストをより公

平で信頼性のあるものになっていることは間違いない。

8. おわりに

本稿ではエストニアのナショナルテストにおけるスピーキングテストの目的、内容、評価方法の実態を明らかにし、将来日本の大学入試の改善に向けての教育的示唆について考察した。

日本人が英語を話せない大きな要因の一つに、指導の過程や出口、とりわけ高校や大学の入試問題にスピーキング能力を問われることはほとんどないことが様々な研究者や学校現場で指摘されている。スピーキング能力を強調する以上はその能力をきちんと評価し、その手立てを考える必要がある。生徒たちの出口である大学入学選抜試験をかねたエストニアのナショナルテストにおいて、テストの目標値としている CEFR の B レベルに実際相当しているかどうかの検証、スピーキングの評価、さらなる教員研修の必要性などの課題があげられていることは事実である。しかしながら、スピーキング能力も他の技能と同様評価され、その手立てが確立していることは、今後日本の大学入試改革において多くのヒントを与えてくれているのではないだろうか。エストニアのスピーキングテストの形式をそのまま日本の大学入試に入れることは困難であるが、日本の大学入試においても指導と評価の一体化が実現されることを願う。

注

1. 現在、エストニアではエストニア語を唯一の公用語としながら、ロシア人だけでなくその他の少数民族（2010年現在でロシア人25.5%、ウクライナ人2.1%、ベラルーシ人1.2%）に対して、母語での教育を受ける権利を保障している。その一方で、非エストニア人に対してエストニア語の履修を必修としている。2003-04年度言語別の学校数において、ロシア語系の学校はエストニアの学校全体に占める割合は14%（83校）となっている（米崎, 2010）。
2. エストニアの教育制度は、義務教育（第1学年から第9学年）段階を基礎学校(Basic Schools)と呼んでいる。基礎学校修了後、一般高等学校（Upper Secondary Schools）と職業訓練学校(Vocational Schools)に続く。
3. NEQC は現在 Innove Foundation と統合されている。
4. 2003年に改名され、現在は Ministry of Education and Research（教育研究省）となっている。
5. ウォームアップの質問の例（Alas, 2014）：
 - 1) Let's talk about television. Is television a good way to learn a foreign language? Why? What TV programs are popular among young people? Why?
 - 2) Let's talk about bicycle. How popular bicycles among young people? Why? What means of transport do people mostly use in Estonia? Why?
 - 3) Let's talk about singing. How popular is singing as a hobby among young people? Why? Would it be a good idea to have singing as a career? Why?
 - 4) Let's talk about furniture. What furniture do people typically have in their living-room? Why? What kind of home would you like to have in the future? Why?

参考文献

- 伊東治己(編著) (2008) 『アウトプット重視の英語教育』 東京：教育出版
- 伊東治己・川村亜紀・島田良子・西原美幸・船戸詩織 (2007) 「大学進学予定者を対象とした英語能力試験の国際比較—日本の大学入試センター試験とフィンランドの Matriculation Examination を対象に一」 『四国英語教育学会紀要』 第27号, 11-26.
- 白井恭弘 (2012) 『英語教師のための第二言語習得論入門』 東京：大修館書店

- 米崎里 (2010) 「エストニア—小国からの発信、言語教育の先進国を目指して—」大谷泰照 (編著) (pp.243-253) 『EU の言語政策 日本 の外国語教育への示唆』東京 : くろしお出版.
- Alas, E. (2010). The English Language National Examination Validity Defined by Its Oral Proficiency Interview Interlocutor Behaviour. Retrieved from <http://www.etera.ee/zoom/1960/view?page=65&p=separate&view=0,0,2067,2834>
- Alas, E. (2014). National examination in English 2014. Retrieved from http://www.innove.ee/UserFiles/Riigieksamid/2014/Inglise%20keel/National_examination_English_2014_Ene_Alas.pdf
- Alas, E. & Liiv, S. (2009). Constraints of measuring language proficiency in Estonia: The national examination in the English language. *Estonian Papers in Applied Linguistics*, 5, 19–32.
- Alas, E. & Liiv, S. (2014). Assessment Literacy of National Examination Interviewers and Raters – Experience with the CEFR. *Estonian Papers in Applied Linguistics*, 10, 7–22.
- Kont-Kontson, R., Alas, E. & Liiv, S. (2013). Developing interviewer proficiency: A self-perception survey. *Estonian Papers in Applied Linguistics*, 9, 113–129.
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science & Technology (MEXT). (2014). *Report on the future improvement and enhancement of English education (outline) : Five recommendations on the English education reform plan responding to the rapid globalization*. Retrieved from <http://www.mext.go.jp/english/topics/1356541.htm>
- Ministry of Education and Research. (2011a). *National curriculum for basic schools. Appendix 2: Foreign languages*. Retrieved from <https://www.hm.ee/en/national-curricula>
- Ministry of Education and Research. (2011b). *National curriculum for upper secondary schools. Appendix 2: Foreign languages*. Retrieved from <https://www.hm.ee/en/national-curricula>
- Appendix: 2014 年度ナショナルテストスピーキング評価表

	Task completion	Vocabulary	Grammar	Fluency & pronunciation
5	Deal with the tasks <u>effectively</u> . Responds to all aspects of the tasks. Expresses his/her ideas and opinions with precision. Presents complex lines of argument convincingly.	<u>Wide vocabulary</u> . Has a good command of a broad vocabulary and can express him/herself clearly in an appropriate register without having to restrict what he/she wants to say.	<u>Excellent control of grammar</u> . Maintains a high degree of grammatical accuracy. Errors are rare and occur in complex structures only.	<u>Very fluent</u> . Can express him/her fluently and spontaneously, almost effortlessly. Appropriate pronunciation and intonation and only natural pauses.
4	Deal with the tasks <u>well</u> . Responds to most aspects of the tasks accurately and effectively. Or responds to all aspects without expanding them.	<u>Good vocabulary</u> . Has enough vocabulary to discuss both everyday and some abstract topics. Can paraphrase when necessary. Only occasional misuse of words. Mostly appropriate register.	<u>Good control of grammar</u> . Does not make errors which cause misunderstanding. Simple structures error-free. Complex structures are frequently attempted but these may contain errors.	<u>Fluent</u> . Can produce stretches of language with a fairly even tempo; although he/she can be hesitant as he/she searches for patterns and expressions. There are few noticeably long pauses. Pronunciation and intonation mostly correct.
3	Deal with the tasks <u>unevenly</u> . Responds to some aspects of the tasks well but has problems responding to others. Is sometimes illogical.	<u>Basic vocabulary</u> . Has a good command of vocabulary on everyday topics. Has some ability to paraphrase. More complicated words and expressions not attempted or misused. Some register problems.	<u>Mostly grammatical</u> . Communicates with reasonable accuracy in familiar contexts. Complex structures, if they are attempted, often contain an error.	<u>Mostly fluent</u> . Can communicate with some confidence on familiar routine and non-routine matters. Can make his/her ideas clear to the listener, but is not able to maintain an even tempo.
2	Deal with the tasks in a <u>limited</u> way. Frequently illogical. Limited personal contribution.	<u>Limited vocabulary</u> . Has enough language to discuss everyday topics in a straightforward way. Words often misused. Frequent register problems.	<u>Limited control of grammar</u> . Simple structures mostly used correctly. Complex structures not attempted.	<u>Hesitant</u> . Can keep going comprehensibly, even though pausing for grammatical and lexical planning and repair is very evident, especially in longer stretches of free production.
1	<u>Attempts the tasks</u> but is disorganized and illogical. Mentions aspects of the tasks without development or ignores them.	<u>Very limited vocabulary</u> . Uses very simple memorized phrases. Uses his/her mother tongue to replace words. Unaware of register. Occasional breakdown due to lack of vocabulary.	<u>Very limited control of grammar</u> . Uses only some simple structures correctly. Uses memorized formulaic utterances. Systematically makes basic mistakes. Most utterances contain an error.	<u>Laconic</u> . Can make him/her understood in very short utterances, even though pauses, false starts and reformulation are very evident. Frequent self-correction, hesitation and pronunciation problems may lead to misunderstanding.
0	<u>Does not attempt the tasks</u> . Misinterprets the tasks completely. The answer is too short to allow evaluation.	The vocabulary is <u>inappropriate</u> all through. The answer is too short to allow evaluation.	<u>No control of grammar</u> . The answer is too short to allow evaluation.	<u>A non-speaker</u> . Impossible to follow. The answer is too short to allow evaluation

(出典: Ministry of Education and Research, 2011)